南芝操車文

へ遠13
1.638
54

図書

門へ 13
部 1638
巻 5

當世樣軍茶之図

おゆみ者ども出世の夏

んぞう 誠の乃よかなひ ひるぐ祈らば天も神やせん

当時乃女夏を神刀 きつと成の新のそうりを

さうぐ或いろ人の見とうす先方盛行して神や

ほうけ祈ることもてまるし有ぐきされなし神仏

をいたんうん四重よ乃をまりるバ行末月書夏

る鏡ひるぐうぐおうい神も佛も祈ら祈たん正

しく新よ者ひうよんちう有よ孔よ極めり方ち

出天生なく人類情るも変れぐして候くうを

仲人出世して今い自分より下女ゆも二人きひ仙乃手廣
乃奥方そい大流行とりてくされ行よ不安くなり
男子社い姫ゆれ紙るよ南市版よい出男子ゆくお姫
今出人よて由年十六歳よゆせゆ人生てうい出書
子の歌有て出一門乃大家より年元入せゆ人紙後
生れいうぶれとゆやお姫ゆをぶれさせゆ子ゆ計矣柔
乃三ッの藤治文よをちーなく一日くて藤紙を屋ゲ
もこくくよ無人孫ゆ見ゆて出婚礼もゲんくと処
引きて由ゆ乃意れ毒ゲうかしいゆ出ゆ藤
ゆやあんとを能舞ちくくゆ孫をゲ柔も矣も

さうぬ社乃程なれおなりひとい一孫高ゆて出ゆを
矣ゆ監ゲ二ゆ辰ナ年い天性の美男ゆて治宮場藤
ゆ事おてくくよ又ゆ有ゆまゲを男ゆりをゲ矣ゆ
傷孫ゆ云美男有ゆくくれ天資男ゆや孫高卑と
云ゆより故こへ遠くよゆを及て集りゆる美男
女ようゲくゲ数ゆ人男い傷孫ゲ治の藤資ゲくゆ
て月もんゆさず女い肝魂を失ひ廣をゲしこゲれ
孫ゆ出ゆりくくとゆや三日三夜ゲ男傷孫ゲ出国
強食てゲゲゆるよ孫ゆ衛孫も高を出くゲ孫ゆ
とゆ人時の人皆云孫ゲ下乃男女傷孫ゲ人数ゲ

云ひのこりなく唐れ女ふ人へ〻り当市館にて白髪
よ夫ちのしび辰ナ命が奥山殿の市機嫌伝家へば女
中達交りこゝろ指れ〻きこ意伝いろあん伝者さぬ
夫ひとりもちく夫沢接移なるれ〻おとゝ家ま
でおりる羅伝ゝ腸をふかたす祖のとゝり
云ゝるやお姫を此時ふれ〻くゝ夫代せられ一面夫
も恒る尺治ひて初めて病と云病伝ふ人ふ白も
一日まゝよ夫れ夫ふ人ふ〻〻〻〻〻〻のおと後へて
訳い家行ふるこゝり辰孫奥方ふ市人重ひ
大方なゝびいか病家毎人病ふ云病もあゝび

泳ん云ふ〻〻〻〻〻〻孫をいふ孫へたみゝゝ夫
ふも云出ゝ治孫ゝ意病ふい夫も知ゝ伝市側
付の面ゝい接あて夫ゝ推言ふい市山ふ孫伝ケ
孫ゝゝゝ夫ふもふゝいふ毎ゝゝふ夫ふ
親日毎乃市人若ふ夫ふ市側付の女
中達伝ひゝふ伝ふ夫ふ市ふ付皆一同ふた
ゝふ夫沢ゝいゝふゝふ夫辰ナ命を意接ふ
れふ夫人ゝ少ゝ辰ナ命が家を孫ゝ伝お姫接
ゝ伝いふふゝ夫ふゝ伝作ふれふゝも夫ふ孫
白ゝゝふれゝ接いふ市ふ夫ふれふれゝも

是又いとゞたのもしるべき御ものく先達て上使より通勝
られ出縁組定まりしよりこれ程嬉しく祝
祝させらるゝ事なれば二方乃内ゝ皆よりこゝに此
付おゆゝ祝言させられ方分別もなくばかりよろく
御ゝ出るゆゑ御おもうも是ハ行先むりゝ私
分別よりおよびやまゝ〳〵ゝ乃先ゝと工夫仕り
いんとて家老へ下り陸ゞ出ゝ〳〵ゝ育て行申ん
細ゝ書立て是ゝ〳〵ゝ殿様ちく一出後おさま
是いゝ所為の為多年ゝ有ゝ〳〵ゝ
ゝらゝん是ゝ奥方様ゝ出ゝ後のゝ上ゝ先奥方

是ゝ姫君の病床へ〳〵せられ老ゝ出ゝ
有てゝゝゝゝゝ出ゝ病室ゝ様ゝ御御ゝ〳〵ゝ
様も〳〵せられ出病室ゝ様ゝ奥方ゝ
者ゝ〳〵ゝ出ゝ孫ゝ奥方ゝ所ゝ〳〵
出ゝ屋ゝゝゝ出ゝ〳〵ゝ屋ゝ〳〵ゝ
姫君の出ゝ〳〵ゝ乃ゝ〳〵ゝ奥方ゝ
させられ屋ゝ〳〵ゝ小ゝ作ゝ〳〵ゝ
病室ゝ行ゝ〳〵ゝ今ゝ出ゝ〳〵ゝ
さゝ〳〵ゝ細ゝ〳〵ゝ
屋ゝ〳〵ゝ御ゝ〳〵ゝ

角りて四方と婚縁定まり大度(内)を整へ家そ
かをすることまつてゐるを思ひ出し
角りを取監こ矢てるを扱ふすることなれば
秘して人に語らざりけるを初るを云い取監とた
ぶれかうかいふし今は辰十郎社に〻くこか
嫡子のり女人すふよ項ひ人ふ勿祢及れを見る
程ふをそて元人し方ふり本義をちく有
つれど今更そもちぶ見ることも早を人つ〻を
ちかをなりいるれば〻系ふいるかをこと
をけるもそれも唯姫を人そて細きよ又彩

あひよう〻ぬ重ばいとぐ辰十郎ふ孫をなり
ふふふ一つ姫ぶむをくもなるばいふせんいつて
今は円辰十郎ふ人し改めて扱ふ孫をを〻
見とそも表向いてあんそんちく但十いふ智
ふそ辰ふ引そ地をふ達して一城をる
ふ辰ふそ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ辰ふ
辰ふの方(ゆ)を抜ぬれふ孫れれふれの人ば奥さ陸物
て学ニ一ふされし飛ふて扱いあれ辰十郎ふ陸物
そそいやと惜く弱ふるれふよ扱移も心て有
しが閉有て奥孫こそ人ふ全くこれふ腹

ぜんぜんぬかるよくやっぱりそれいうまれたんなんぞ
なんぞそひげなんぞ事ゆへよかれのかもしか
ばかまで姫が高まもたのうんえなんぞ祝はもあり祝
だ先ぞだんくおひろへちさまれまくいまぐえさうも
ぞ殺さぬよ殿様こそ不興の祝そて誠よ女房はい
皆ちくまさものなり云義のお後よ及ぶうそめく
河あくくを作ってぞ出させ申へ出ばの奥ちもえ
ほくくしてお殿へのぜ申よ姫ぞいい初めうり屋敷
一生こなうそて歩く学れまひ扱い長十郎ハ面殺
ぞかはぞ今まで意せしいいぞ事ぞ祝りやぞ

那なやあくそれはおさめ社まぐしもの仕合なの
既よ高生よぞとくさ勇ぞんとせしぞ大ぞ
さぞ面めれば今まれ意もさりだっさぞ系
えうり高ひなれば胸もひりけ会もぞ宮有
社内よぞちまち使家ぞ殺ひ申よ絵て義
絵乃聟ぞ乃せれ事ぞ高くおかぬ納して目高
ぞ中ぞ面め大殿内ぞ奥の内新び大方なんぞ絵
よおゆみが智ぞうり事殿りうぞ内殿ぞ申ぞ
かうそもなく此ぞ内ぞ殿ぞも学て文智殿
成安りて大よ感ートへ別将長十郎が書よ

盗ミ出しに逢て紛失しけれバ伝二方もさまざま思
ひて則下りありし処此時おさき廿歳にて辰十郎
は八十つましけれバ又一家にてらんれバ海棠と桜の
ごとく二人並ぶ時ハ恐らくハ又と有まじき初々敷夫婦
一対の雛のごとく別して辰十郎ハ稀成美男
なれバおさきが見とれてハ上もなき男振丈に打大かた
の奥方じに呼れて見けり是縁自分の発明なとは
いへども全く大森の二つとをなへ成をと正しく路
故なりけるて様々と只八合して同学法勝の名栄
法法御御しては江戸へ立のぼり此女おゆきと名付み

さる大名の方へ参りて妙なる縁に依りて此出世故
こなたまでも仕合せよしまくしくかそ頭をを
たよ並び今いこの男も浮世に顔を打もんをりかく
此れ後世一稀よかりなる在合家去寺へ這入して
念仏をたとめ紛ひ溌して有の族が或日おさきが二夫の母
おなじ時此寺へ参詣して同寺主月々日見へ合せ
先を向のも立川とおりひとしく流ぬさま乃後にぞ
添様々を入居なりしおりひむくしれこそ成とひ出
しにさいはまいりれぞくさる成き事成り
審く成文娘おさきが紛失ぽ寺が悉意に

もきまりもんえなく門前茶屋が二階をかりて
人をもし文にておよびたるハ櫓くを入院之見請
りたるハ事也見忘れハ着ましちがふと此月にかゝり
なりける気まで出家下されよと云せられが同学
もなむなら様を場もして両様に及びれが今ハもや
自分も悟度して浮世のゆめのごとくおもひ
境界となりしよ元様にて浮世を見るに
引越家老も發心志てり識に佛経を絵きも
いたりや志らどの教まて当世後世の一大事
を知りそめて先祖の菩提しきりいたしまだ

おなるハ勅ておゆみが身を捨てかねて誓ひし志を
かねて大に驚きれ又ハ恥入て詞もなくて有けるが夫より
剃髪て帰り夫新発意のおへかへりて互ハ先非を後悔して
しかりけられ下されよと云ながら新発意おどろきよく
ずんく子細をきゝ給えば自分がれおそろしき不義を顕し
に懺悔し今日ゆるさるゝおゆるさる事ありがたや
まで有りし發明なるを感じ給ひし母ハいさみけれバ
みづからが身おどろかしやるこゝに悔みて帰らずせめては
此うへかくりゆかりハなけれども識におもひ切て云
まで新発意附て納まり数世間忽然のありまた帰る

是は用ひて幸なりと云ふべし
悔は過て改るに悔なしと云
もの汝が不義い類知れたる
是幸なる人を射るい一えんい漆さられたる是又
乃弧をあらためみへおれ
夢のごとくこれの中にまでおれしとるれば
乃はたなり又貞は永むつてきを方は離別せど
一程と廣く是はいかまじれた是又不義
に依て離ふしを行新一なる中をまでい裏ひて有
しを是も如私不義せしに是ひふしこそ

おせつ男がふと成されて鍛びられども おまつるハ却ハ今
までのきづハ科を心ゆるされて下さるにやと思ひ居
鄙くに在あらバそのゆゑに嫌れ給ふ人ぞとて この
男は取あへて人に顔も合さまじと尼と成て娘が方
へ男の男の懺悔をして親子の対面致しけりされど
新婦は工夫してこの方がんにん給よ讒づく致させる
こさハ夫の媒ありあらバ女に娘が方にて男の懺悔
をせずにこなたを方がうけ恥にならぬ娘にも恥を与
ふ事なる道理なり 斯く女の親をも信じよ なさむひ
男の身のさんげせんとハ無用なりとぞいひける

祇いと夜をしまるより三人にて新枕なり この事
我言ずしてハ何とて娘にまさる事なきさんにハ聟姑
も有よしと何故に親子今迄引とられて有るや 扨又
おのがら家のつま夫と後に継しハ不義いふまでも
して徒ことなどと心をなぐさみて夫婦と治定なりしの悪
そこにみだりに縁しく家の内成娘は一生連添男にも
あしくおもハせまじと又さまざまにかなします
我こそ冬すぐも不便なりとて給ひてこなたハ嫌を
兄尼と成てあらくも父に男の懺悔して親子が始
が彦が為親もその方にそれ 扨又 隠さ給ひ

（ハ）高更山の麓まで出るなり是ハ
此新ひろ（て）みち（を）通て元の新道も是れか
く有ごとなりひたち屋
たゞ〳〵行（き）とそなゑめ垂えより出て裏手
我我垂あるゝ有力の脇我ゆづり郎敬も是義
高代元之原若の新ひろふひ更始伝た菩提寺へ
行て判髪し添川ゝ茅乃麓をむすび住今社
こゝ方ゞん及甲ゝ我せゝゆゝてゝおゝゞ言（也）
事ハい一ついこゝ方も言伝を学文ゝる所を
又ゝゝ原毛我ゝるでゝ（く）行ぬれハ原垂ゝ

ハ親のなゝ（ま）ゝうして変ハ高砂成婚なれハ久
ゝも毛ゝ極ゝり書ハ婚ゝ（く）ゝ伝下女下男名
二人ハ（て）おゝゞ方（ゝ）ゝ方（ゝ）ゝ高砂乃毋ゝ
寛乃毋ゝ（て）ゝ細有て唯ゝまで面稽ゝ
伝元年ゝさゝ川ゝさまく此変乃ゝ伝年一月
迄ゝ変ゝ云入れハ元の元ゝ婚ハ
元ゝ（て）ゝ婚ゝ人ゝ元ゝ（て）ゝ婚ゝ兼おもゝれ
ハ中元ハゝ奥（へ）ゝ入（る）ゝ脇ゝを此ゝ
おゝゝ（て）ゝ扱ハ元伝ゝ毋の才ゝ
ひゝやゝ元ゝ（て）ゝ婚ゝ一乃ゝ所（ハ）

入て家道断絶の儀に及び絶て久敷相続の儀難
て接待さへ詰くくるしきぬ今はいとまを願ふ
そめられぬは是誠に女の情いく有るべき事なり
ものこそ哀なれ悔山なれた文ゝ書ず唯さ
しうつむきて気もひだるう成ぬ
後悔こ毋が愛ゝ一てはなれ
と雪ふり初くおどろき入こる
哀ゝ西月なきいこ弁ひとり伝て感悔ハ
十羅と誠すゝ云ゝ有のまゝつれ合彩雲へ感
悔して訪さ為も書へ今ハむしれ不孝成

なをゝ手接ぬまゝ見ゝ毋となりつく
詰られゝ泣ゝ詰ゝて詰られゝ多ゝ
作ゝ親を捨ゝ出家一不孝ゝ科人ゝ
みぼゝゝゝ科を出ゆるされ
有ゝ又ゝ出ハ俗ゝ出ゝん紙ゝ
ゝまゝ出ゝ絶ゝ
なゝゝ深ゝ為ゝ行ゝ
ゝ出ゝ合又ハ異ゝ成ゝて今ゝ
不孝ゝ人ゝ必定なれゝ有れゝ

臓悔して所望もなしとて町人風情の娘なれば
とも云べき所に一つハかつらさ顔ばかりさ此上なく
未だよ新さの新面さきされまくるれば以て良
え新されハこと面でて面られ新面れこてあらう
さまこさんげせんさ云だおゆこられいなもらめすす
こていの所の加を取してこの所ごの新こて云こと
文こ是まいでせんやうのだこ事い家狂もれのよ
まだこまで面倍ちき事いこげうこいれこも
中だしおしも話しこうだ必こ所の臓悔いを
用ちきこ一つゆこさる代れ面まだみだうこ力を絶

中だ一私代不役こ云古未だ絶りんと云
一ちば決して所望ちりと思くい代心板文こ
奥こ入て云こと文のちこ出唯今までい包こ流し
いの代私実の親い行の守様の所事こて板新
新義さやい加こさ事こうさんが私義れ意れ出
こ設先の分別ちく不所抜せこ付新家代
こて唯今まで面倍新代ゆるこる母が
新祢こ右れ新家代ゆるこいの絶こる母が
なこう所こ是ちこれてでこうだこうこ云こ所こ
加を引変て云ちい先金くこい又の為こうこ

あまさるゆゑ世中にありて孔子老子の道人おのづから自然
と符合せり罪劫無量ででも有りて不思議なれ
しも有まじきゆゑなり仏在は三万那人の
姓にも役人にあひしに其文をさ親元代の日によ
法ひやなりと云故なればば辰十郎も喜んで子の孝親
子の対面におよび同前文車に放ればおらうが
不身持せしと云事辰十郎ひとりは誠に世の是非
は偽りなりんとこそ後家の根を押て胴の修は何
ぞんに是有ての人ゆゑ成仏し故又おらうは捨てを入る
心当地に立帰りふるさと伐笑し折[illegible]も茂り物

残せしうじ更に一線も請ず是又おもしろき法師
と成てそれより後は新義入る方へも同学出入
して在なるゆゑ煩悩経が世代捨し神新義法
師は了源と改名して本寺仏の儒仏を建立し
捨てを入る同学は光風[illegible]寺代再興して
おびただしき役[illegible]極楽人の是代をぞ幼て今
[illegible]繁昌せり誠に言雄文字絵像[illegible]原
のむしぶりよおりひ会されて是又珍しき事な
なり

当世操草巻之五 大尾

昭和三戊春

書林

八丁堀岡崎町　門田庄兵衛

日本橋通弐丁目　竹川藤兵衛

馬喰丁壱丁目横丁

彫工　町田平七

二十八十七